

〈創立95周年記念特集号〉

創立当初より昭和初期までのころ

東洋英和幼稚園園長 荒牧富士子

東洋英和幼稚園は、我が国最初の幼稚園が女子高等師範学校（現お茶の水女子大学）に創設されてから四十年近くのに創設されている。（因みにキリスト教主義幼稚園が我が国に創設されて三十年近くのに）幼稚園としての認可が正式に下りたのは大正三年十二月であって、その母体はその三十年前に創立された東洋英和女学校であった。

しかし当時の幼稚園は雨天体操場に増設したもので決して立派な建物ではなかったので、大正八年に上田の梅花幼稚園保母伝習所が東洋英和幼稚園付属保母養成所として発足した折り上田から学生を連れて上京した故児玉（旧姓西尾）光子教諭は、お世辞にも、すてきな幼稚園とは云えなかった……。と当時の幼稚園の建物の第一印象を語っている。山深い信濃で既に西歐的な幼稚園の建物を見て来た彼女の本音であったと思う。

さて、創立当初の園長はミス・ブラックモアであった。この宣教師は保育の専門家ではなかった。また創立当初の保母も専門の教育を受けた人であったかどうかはさだかではない。この人は脇山靖子といって北海道の北星女学校を出てからのちどいう経路で英和に来たのかかわからないが、とにかくこの人が英和幼稚園の幼児教育の創造者でもある。こうして幼稚園が始められている間に上田の梅花幼稚園付属保母伝習所では着々とカナダの宣教師たちの教育専門家によって保母のたまごが



当時の卒業式

ミス・ドレーク ミス・クレグ ミス・ブラックモア

養成されつつあった。こうしてこのなかから一人の学生が選ばれ上京を命ぜられ新学期四月より秋のはじめまで英和幼稚園で学生の身分のまま働かされている。この保母はその後上田に帰り学業を卒えて再び上京、東洋英和幼稚園の主任に若くして就任している。脇山靖子はその後台湾へゆくと行って再び幼稚園に戻って来なかった。当時は一人が資格のあるもので、一人は東洋英和女学校を卒業したものをヘルパーのような形で一緒に働かせピアノなどを弾かせていたらしい。そのころの園児には高名な実業家や華族の息子や娘があり、卒業の時の写真などを見ても当時の華やかな幼子の園が偲ばれるのである。ミス・ブラックモアの帰国後ミス・クレグが園長となり、上田より学生とともに上京したミス・ドレークが、幼稚園と養成所の学生を指導した。このミス・ドレーク

はミス・クレーグの後を受けて園長となり、現在にいたるまでの東洋英和幼稚園の一つの理念を礎いた人とも云えるのではないかと思う。初期の生存している保母たちに聞けば、どの人たちの口からもミス・ドレークのことがのべられる。即ち、“子どもたちが自分でものを考え、行動する経験をさせなければいけない。教育とはこちらの計画を押しつけることではない。” “本の好きな子どもにしたいと思ったら子どもに読め読めと命令するのではなく、まず保母が楽しそうに本を読んでいる姿を見せることである。”など、当時の日本のこどもの教育のなかでは真に新しい教育観を持った発言であり、東洋英和幼稚園とその養成所の若い学生たちには実に新鮮な価値のあることばとし

小羊は育つ

半世紀

まさに半世紀、私が広島女学院から東洋英和に移ったのは1929年(昭和4年)の4月、丁度50年、半世紀昔のことであった。

思い出は限りなく、走馬灯のように流れて消えて又、おぼろに記憶の片すみを走りぬけて行く。東洋英和女学院創立95周年の記念号。100年誌にも備えて思い出をまとめ、稿を正してその責を果さなければと、重苦しさを覚えるが思いつくままに。

女護島の浦島

私が英和に赴任するまでは専任の男性教師は、藤田静雄先生(教務主任)ただ一人で、外には二・三人のパート嘱託の男性教師だけで、学院の主脳は全て女性であった。そこにはまことにうるわしい校風が培われ家庭的な温いムードがあふれて

てひびいたらしい。

このようにして創立当初は、建物を見ただけでガッカリした児玉光子もその建物のなかで情熱を燃やしてキリスト教幼児教育の場に励み出し教育の内容も養成所によって訓練された練達した保母が年々その教育にあたり、園児とその母親に対する確信を持った指導は次第に多くの人たちの敬服の的となった。その後、故福島寿美江が主任となりミス・ステーブルスが園長となる。

昭和七年にはミス・ハミルトンのすばらしい構想のもとに当時としては近代的で設備の整ったしかも幼ない子どもたちが生活を充分楽しめる幼稚園が竣工した。

元小学科主事 檜村 辨市

いた。日常のことばづかいかにも、校内での立居ふるまいにも特殊な雰囲気と気品とがあった。英和っ子はそれを誇りに感じ、家庭ではその優越感に満足していたようであった。

時は流れ世相は変わった。1929年東洋英和が創立されて45年、変革の萌が見られるようになった。あの懐しいクラシックな木造校舎とそれを囲んでの校庭、校門を入れて坂を下って玄関までの一木一草、思い出は果てない。50周年を目標に校舎の大改築の構想が具現される以前に、教育の中味に新しい息吹をと気づかれた先覚の識見は高く評価さるべきであろう。

こうした機に私は英和に迎えられた。先任の先生方の心の中には、言い知れぬ不安と好奇を交錯させながらも、新参者にいろいろと行届いた好意的なご配慮をいただいて、有難い思いで過す日日

であった。しかし何となく勝手がちがう、野人には戸惑いすることの多い毎日でもあった。緊張の毎日に生甲斐を覚えて楽しかった。

半世紀前の小学科

1900年(明治33年)東洋英和では、予科の下に幼稚科を設けて、小学児童の教育を行っていたが、1902年に至って正式に小学校と同等の教育として指定されて初めて6名の卒業生を出した。1909年(明治42年)義務教育年限の延長によって、幼稚科及び予科を通じて6カ年の小学校として公認されて現在につながっている。

当時小学科の教育の主眼を次のように規定している。

「本小学校は、小学校令の定むるところに従い、一般官公立小学校同様に、諸学科を修得せしむる事は勿論、キリスト教主義に基きて善良なる品性の陶冶と心霊の培養に努め各個性に即したる教育を施すことを以って主眼とする。」と。

95年の変遷

予科の制度は本校創立の当初からあったように思われるが、幼稚科(幼稚園ではない)小学科・小学部と時代につれて呼び名は変わっても現在の小学児童を対象の制度は、80年余に互ってつづけられ、常に変らぬ神の恩寵と最善の教師主キリストの導きによって、たがいに愛しあい、信じあい実に和やかな温い親しい学び舎として成長発展して今日に至ったことは、只ただ感謝の外はない。1912年(昭和4年)に小学科主任の制度が定められてからも主任・主事・部長等と呼ばれながらも、その地位の格づけと、小学校教育の独自性が認められ、次第に拡充されて今日に到った。

昔を知る者は感慨無量であろう。

新しき皮装に

1934年(昭和9年)50周年を迎える前に幼稚園と青楓寮が新築移転し、その跡を拡張整理して新校舎の建設が完成した。近代的なスパラシイ校舎、関係者一同喜びと感謝を以って落成を祝った。新装なった教育の殿堂、新しい皮袋は新酒を待っている。その造り手とその新酒を注ぐ者となる。新教育の試みは私学の使命であり又特権でもある。

象牙の塔から新しい文化へ進出する好機が到来した。除々にその計画はすすめられて実行に移された。成城学園から松原龍蔵、関猛の両師を迎えて陣容は整った。理科教育の研究者松原は温厚な人格者、関は美術教育の新鋭で学校劇の指導にも当たられた。新教育への挑戦に校内の空気は革まり、さわやかな風が吹きぬけて、子どもたちも明るく朗らかに楽しい学習をつづけて元気に伸び育っていく。広々とした青い草原に小羊の群が育つように。



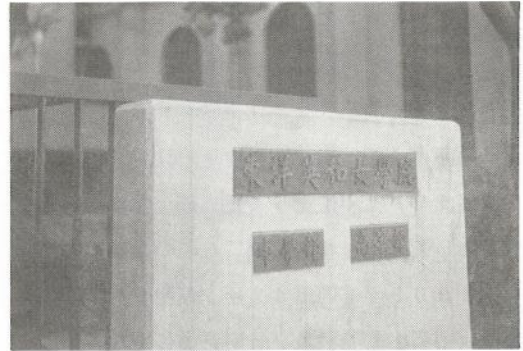
“小羊”第一号の表紙から

中 学 部 ・ 高 等 部

中 野 登 美 子

昭和23年の冬であつたらうか、故井上健之助先生が高等女学校の教頭でいらしたが、学制の改革により、六・三・三(四)制が施行されたので、当年度の高女第五学年生徒は三月に予定通り高等女学校を卒業してもよいし、もう一年、新制高校三年生として在学し、翌年高等学校第一回卒業生となる事も出来るというお話があつた。戦中戦後の混乱期に少女時代を過した此の学年は、学校工場などにも動員されて十分な授業を受けられなかつた事もあつて、かなり多くの者が進学し、(当時の専門学校へ)それ以外の人たちは新制高校へ進んだ。その数は40名であつた。次の年度も個人の自由でどちらかを選ぶ事が出来て大多数は高等部第二回生として卒業した。第一回生は教務上は20名づつ二クラス編成であつたが、管理上は筆者が二クラスまとめて担任し、たしかホームルームは現高等部の美術室が当てられたと思う。部長は中高部共、長野彌先生が兼任され、教頭も井上先生がお一人で兼任なさつた。カリキュラムや教科書など大して整備されて居らず、学校に来ても何となく所在なさそうであつた。「民主々義」などという新しい課目を故吉本てう先生が担当なさつたのを覚えている。新制中学は昭和二十二年にスタートしているから、六年間を新制度で過した人は昭和二十八年に卒業したわけである。その頃はまだ小学部も今の別館に居たので、校舎はかなり手狭になり、保育科はその時代に青楓寮を教室としたのではなからうか。

教師の側も新制度に合わせて免許書き替えという事で、新憲法を初め、ノーマルカーブによる



中学部 高等部 校門

教育評価の勉強など、三十単位近くを取得する為に、大挙して夜学講座に通つたものである。その間、校地拡張、専攻科設置、小学部校舎、短大校舎と次々に新築され、中学部専用校舎が出来るまでは何かと落ちつかない時代であつた。生徒数も此の間に増大し、今、東光会名簿を繰ると、創立当初から六十年間の卒業生は約80ページに納まっているが、その後三十数年の分は300ページ近くにわたっている。年間の在学学生総数は現在約2,300人(内、中高部1,100名)、教職員総数は290名に及ぶと云う。

序でながら制服の件であるが、昭和四年制定の時以来、セーラーの金線一本は小学生、女学科生は二本、師範科生(今の保育科)は三本であつたが、戦後保育科には制服が廃止され、中学部、高等部が共に二本線で、三本線の制服は見られなくなった。尚、小学部の上衣には衿元に、一本線の入つた別布が逆三角形に覗いていたが、これも戦後見えなくなった。

本学院は、中高一貫教育で、中学部、高等部を分けて語る事は困難であるが、別々に行われてい

る数少い行事は、入学式、卒業式、始業・終業礼拝、毎朝の礼拝、遠足、競技会などである。生徒活動としては、YWCAは中高別であるが、クラブ活動は中高合同である。他に夏期行事（修養会

キャンプ）は自由参加であるが、中高別に行われた時期もあるが、現在は中三以上の自由参加となっている。書き並べれば切りがないが、簡単なまま筆を措く。

校章楓の虚々実々

伊勢紀美子

東洋英和女学院の校章楓とカナダ国旗の紋章カエデとが共にカナダ楓に由来していると聞くに及び、この二つの紋章の違いには驚かされた。何故これ程に違ったのだろうか。こんな愚問に端を発し、校章楓の起りを尋ずねるに至った。事件から風雪50年を経たことだけはあって、その記憶も記録も薄れ、結局は虚々実々の物語となってしまった。

昭和2年、50年になろうとする本学の歴史を更新しようと、改築運動が起っている最中、校風の制定に伴って、校章楓が決定された。「…その図案には時の藤田教頭、白鳥（中務）教師及び図画担任の高沢教師が当り、楓の中にT・Eを入れた。」との五十年史の記事に基づき、御健在の中務幹子先生に御話を請うた。やはりカナダに係わりがある学校だからカナダ楓にして、その中に東洋英和の頭文字を入れてはと、教頭の相談に気軽に答えたところ、委員会を通り決定してしまった。図案は藤田静雄先生が（高沢雅雄先生も加ったかもしれないが）専門家に依頼したと思うので、どんな楓をモデルにしたか分からない——との御返事であった。

序に、当時の理事会記録（当会は現在の教員会的なものも兼ねていた）を整理中の中野先生にお願ひして、校章決定に関する経緯が記載されていないものか調べていただいたが、生憎、手掛りひ

とつすら得られなかった。

次いで、昭和9年5月29日付、F.G、ハミルトン差出し、東京府学務部長宛の「学校の徽章校訓等ニ関スル件回答」という公文書に、1.徽章ノ模様及実物 楓葉型 実物添付 とあるので、都庁に赴いてみたが、こういう実物は用が済み次第処理されるものだそうで、残存の可能性は皆無という返答に直面した丈だった。最後の手段、学院の物識博士方に尋ずね回ったが、上田朝様をはじめどなたも五十年史の記事以上には御存知なかった。

ところで、カナダ国旗の紋に楓が何故選ばれたのか。種々あるカナダ楓の中で、代表に選ばれたのは、形から推察するにサトウカエデであろう。これは葉が単葉で波状縁の裂片3～5個を持つ大木であり、かつての開拓者達には食となり、家具となり、燃料となり、生残る為の「恵みの木」であったため、新しい国の活力のシンボルとして英仏の争いを超越して容認されたようである。本校の場合は、楓をシンボルにした国から来た創立者、それに続く敬虔な奉仕者を記念すると共に、原点の目印しとして楓をシンボルにしたと思われる。

楓類は過度の乾燥を嫌う木で、紅葉の名所には必ず流水があるそうだ。楓と水が不可分であるということでは思い知らされた経験がある。先年、

創立記念祈禱会の席を紅い楓と白菊で飾ろうと、楓を求めて花屋を廻り歩いたが、徒労に帰した。幹を離れた紅葉の枝はすぐ枯れて落葉し、売りものにはならぬ為、花屋には無かったのである。又、カナダから土産に春ガーネット色に芽吹く楓を持帰ろうとしたが、接ぎ木用の苗木の出荷季節でなかった為、断念したことがある。これも水上げと関係あるのであろうが、この楓はその土地の土着の同属の台木に接ぎ木しないと育たないものだそうだ。こうした楓の性質は実に深く、本学の生き方に示唆を与えてくれていると思う。

話によると、校章楓の原型を一番よく止めているのは、校風の袖に付ける楓とマーガレット、クレイグ講堂の額縁中央にある楓だそうである。大

小の年史等の表紙、校旗、公的用具、記念品等に付けられた楓模様は、その数だけ種類がある。校章とは正用定型がないものなのだろうか。

最後に、当時の校長ヘミルトン先生は、合理的で簡潔を好まれると共に鷹揚であって、大筋にOKを出されると、一切責任者に委かせ仔細に及ばずであった方という。根本のカナダ楓が確認されている限りにおいて、その一時的、表層的形状の崩れをも内に抱擁して来た校章の歴史は、ひとりの人格が時の流れ方をも支配し、伝統という言葉に置換えられうるものと教えてくれた。

かの愚問はこの愚答でついに終わったのである。

短期大学となった頃の保育科

黒田成子

昭和25年教育制度の改革によりわが国に始めて短期大学というものができました。又教員免許法という法律ができ、履習単位数によって教員の免許状が与えられる事となりました。このためそれまでは1ヶ年の勉学で幼稚園保母の資格が得られたものが、2ヶ年にかかる事となり、名称も「教諭」に変わったのです。

わが東洋英和の保育科は1905年(明治38年)上田市においてカナダの宣教師エタ・デウォルフにより梅花幼稚園保母伝習所として創設以来2年課程をつづけてきました。東京では保育の学校で2年課程をもっている学校は東洋英和だけでした。そのため長年にわたる伝統をもっていた英和に「文部省が学科の事を訊ねにきたんだよ」と元院長の長野先生がよく話されていました。



スクルトン先生 リズムの授業

保育科が短期大学になってからの大きな特徴は一般教養(当時の称)18単位以上の取得を要する事でした。法学のうち、2単位は「日本国憲法」の勉強でした。講師として中央大学の市川秀雄教授、心理学には東京大学の岡部彌太郎教授等そうそうたる方々が出講されました。専門科目に関し

ては英和出身の村岡花子先生や長野静江先生等からよご指導を頂きました。

1949年～1958年保育科で教鞭をとられたミス・F・スクルトンをこの夏休みに短大副手の本間さんが訪問し、インタビューをして下さいましたので以下その一部を紹介します。

問1. 短期大学の初期について

スクルトン先生の答 終戦の後保育科のスタッフには相当移動がありました。長野彌先生、ミス・L・ロークと私は短期大学の規準に沿うように講師陣を整え、必死になって準備し、とうとう許されました。1951年から静岡英和に行かれたミス・ロークに代って、ミス・ハミルトンが短大のヘッドになりました。

問2. どんな講義を担当されましたか

答 「児童研究」「幼稚園の教育課程」と「幼児の社会研究」「遊戯」という授業の担当者がなく、これも私が引きうけて音楽リズムやゲームを教えました。他に1年生を毎週幼稚園見学に引卒し、観察記録のノートの点検をしました。実習も指導しました。

問3. 実習について

答 実習園は5園あり、学生は午前中実習に行き、午後は学校へ帰ってきて授業を受けました。立派な講師が多い中でもキュクリッヒ先生の授業はすばらしいものでした。

問4. 保育科の教育で何が最も大切でしたか。

答 私の願いとしては1人でも多くの学生が心から献身した信者になり、日本全国の教会幼稚園に奉職してほしいと思いました。私は日本語が不十分でいつも通訳をつかって講義をし、又レポートを見るときは全部何度も読み返してもらって採点しましたのでとても時間がかかりました。けれども、私が教えたかったの学生たちが、さらに勉強して今の短大のスタッフとして活躍している様子を知るにつけ、自分の努力も無駄ではなかったと思って感謝しています。

(私事で恐縮ですが)短大第1回生として在学した私の思い出としては当時学生数は1クラス28名、教室は青楓寮の四階を使用、事務職員は鎌倉ヒルダさん(昭和20年卒)1人でした。宣教師の先生方の授業や生活指導は大変厳しくキチンとしていました。殊に宗教教育に関するものが印象に残っています。学年末は3月に試験が終わった後迄も授業がつづけられました。時に休講があるとミス・ロークがとんでこられ、聖書のお話とか讃美歌の練習等があったものです。

現在から見ると全く小規模で素朴な姿でしたが、よき伝統を生かしつつ戦後の荒廃した中で再出発の意気をもりあげ、短期大学としての基礎造りが精一杯なされた大切な時期であったと思います。

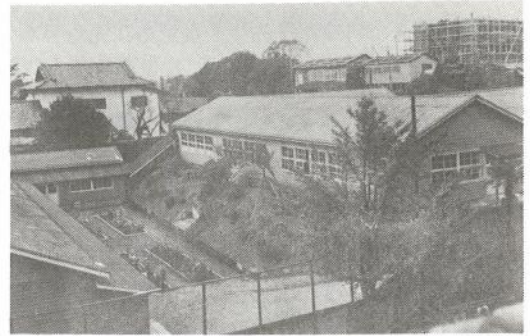
英文専攻科のことなど

齋藤純子

高等部の父兄の方々、そして生徒達の強い要望と東洋英和で育てた生徒の最後の仕上げの場をつくりたいとの先生方の願により短期大学への段階

として英文専攻科が発足したのは昭和28年4月のことでした。47名(外部から4名)の学生を迎え現在の短大講堂の所にあった木造校舎で新し

い出発をいたしました。一クラスだけでしたので当時校舎建築中だった小学部6年生が同居しておりました。専攻科新設のために長野彌先生故井上健之助先生をはじめ委員の先生方が長い時をかけて検討し努力されました。学則の目的には次の様に書かれています。「英文専攻科は東洋英和女学院に於ける、幼年期より成年期に至る基督教の精神に基く、一貫教育の最終教育を行うために設置せられ、東洋英和女学院短期大学保育科と並び、英語に関する二ケ年の完成的教育を施し、高き教養を有する有能な社会人を育成することを目的とする。」学科目、単位数、履修方法すべて短期大学と同等に行われました。(学科目は省略)紙面の都合で先生方のお名前もはぶきますが、立派な先生方が揃っていらっしゃいました。その点は恵まれていたと思います。主任教授としてお迎えした故会津常八先生は朝早くから夕方まで小さな研究室で黙々と勉強をしておられました。力の弱い学生の為には多くの時間をつかわれ又、読書会をなさったり地味なよい先生でした。英文科増設の為にも貢献をして下さいました。おだやかな御様



短期大学木造校舎
保育科棟 英文科棟

子が忘れられません。松尾芳子先生は訓育の面にも心を配られ注意をうけた学生達も多かったようです。その間に英文科増設認可申請の準備もとのい昭和28年9月提出、翌29年3月認可されました。もう一棟の校舎も完成し保育科が青楓寮から移り4月19日両科合同の入学式が行われました。性格の異った二科の為に難かしい面もありましたが、ミス・ハミルトンはじめ先生方が両科の交流に心を使われ、よき発展を願いつつ努力をいたしました。昭和30年3月に学生たちも教職員も最初のいろんな経験を味わった英文専攻科は廃止されました。

英 文 専 攻 科

英文専攻科卒業生 島 田 恭 子

……………「一番印象的なのはA先生」皆同感。「チャールズ・ラムばかり」「そうよ、ラムラム」と異口同音。余程ラムには手古ずった連中ばかり。「いつもお昼にパン半斤」「麻縄みたいなあのベルト」「独特の言葉遣い」「先生の立派な英文法の本…ほら、茶色くて厚いの覚えている？何しろ英語で英文法習うのだから、分る訳ないわよね」「全くね」……………「タイプはKさんのお姉

様」「皆熱心だったわね」「速記はとても日本的な感じの先生」「N先生の発音学苦労したわ。それ迄カナダ式発音でしょ、まるきり違うんだから」「K先生のお兄様にキーツの詩教わったわね」「英国史はM先生」「そう、英文学もね」「現在の院長のK先生にも教えて頂いたわよ」「英語の時間によく英語の歌を教わったわね。ほらムーラン・ルージュの歌とか…」「外国人の先生の所に

およばれて(ティーパーティ)したわね」「あれ英会話の勉強のためでしょ」「ミス・Hの授業で、国連のパンフレットを訳す宿題にクラスの一人が持っていたその日本語版を写して提出して叱られたとか…」「お料理はN先生、今でもあの頃習ったコロッケ作っているもの」「お惣菜料理ばっかりね」「器もなくて高校から借りて」「時代の所為よね」「体育館も食堂もなくてね」「校舎はベニヤ造り、教室の隣が職員室で!! 境もベニヤですもの」

「誰からもこの話が出て来るのだけど、そもそも入学の時に、今は専攻科だけど卒業する時には短

大卒になれるから…と言われて入ったのに最後迄専攻科卒にしかならなくて皆怒って抗議したわね」結局短大卒の資格が欲しければ、一年下ってやり直せと言うので、その為の中退した人だっている位ですもの。名称こそ専攻科でも修得した単位は短大並の立派なものだった。当時いかに立派な先生方が揃っていたことか。ユニークなそれぞれの分野で優れた業績を挙げられた素晴らしい先生方が揃っていた。但しその事に気がついたのはずっと後の話……………。

(紙面の都合で座談会の一部を載せました。)

短期大学英文科一回生

英文科卒業生 岩崎明子

昭和二十九年高等部卒業の私達は、確かにその年発足した短大英文科の第一回生であった。東洋英和が創立七十周年を迎えた年である。卒業後進学する希望など毛頭なかった私は、間際になっての吉本先生の、「せめて短大位出ておきなさい。丁度今年英文科が短大になりますよ。」とのお言葉で、特別の抱負もなく、「何となく」入学したのであった。

当時の校舎は、今の短大の前庭の位置に木造一階の建物が保育科と英文科と一棟ずつ、傾斜地なので英文科の方が少し高く、坂の渡り廊下が二棟をつないでいた。日当たりの良い窓際の斜面は、春ともなれば可愛い花々で彩られた。学級は一年二年とも一組ずつ、二年生は前年度に発足した英文専攻科生で、短大卒の資格を得る為に又一年からやり直された方達が確か四人程いらした。その方達を含めて私達のクラスは五十六名、そのうち

他の高校から入られた方が十名位いた。担任は当時英文科主任でいらした松尾芳子先生である。

さゝやかな校舎で小ぢんまりと発足した短大ではあったが、「何となく」入学した私に与えてくれたものは意外に大きかった。それまでに学習した総括的な英語を細かく分けて深める楽しみ、さすがに高校とは違うと感激したお講義の数々、同好の志の集いの中で得た生涯の友。

実際、新設にしては素晴らしい授業に恵まれたと思う。中でも忘れ難いのは、今は亡き河村重治郎先生の英語学のお講義である。その内容は英文講読あり英詩あり、英国史から英語史、時には一般教養の話にまで及んでいた。私は今でも折にふれ、先生が選び自らタイプして下さったエルドロード(黄金郷)やマイナーエクスタシー(小さな恍惚)等の、短いが珠玉のようなエッセイを思い出す。訳し終えた時、それらは若い私達に色々な

ことを教えてくれたものだ。人間の欲望は果てなく、人生の階段は無限の連なりをなしていることに嘆き、焦りを感じるだろうが、それ故にこそ我々は忍耐強くも生き続けられるのであり、黄金郷をめざして旅することは到着するに優るのだということ。或いは又人生には何度かはと胸を打たれる瞬間がある。それはたとえば音楽、自然美、詩の一節等々、人によっても異なるほんの小さな出来事であるかもしれない。しかしその瞬間を大切に心に留めておくことは、その人の人生をより豊かにし、絶望に打ちひしがれた時、必ずそれが力になってくれるだろうなどという事を。

私達の誰もが輝きに満ちあふれた人生を送ったり、或いは自分の人生に於て何か素晴らしい大発見を経験できるとは限らないのだから、自分のささやかな人生の中で心豊かに暮らせたなら、それが幸せというものなのだと教えて下さっていたので

短大付属かえで幼稚園の設立

本園が開設されるまでには、その計画充足以来5年が経過していた。1968年、当時の長野彌院長が東洋英和女学院の教育に感服された小滝頭忠氏の尽力を得て、将来ここをもう一つの幼稚園の建設用地として購入しておかれたことに始まる。

当時この辺りは一面の山林であり、田園都市線の延長にともない「多摩プラザ」地区が団地及び宅地として計画開発されるに及んで急激に新興住宅地として整備されたものであった。当然住民の急増とともに地域から幼稚園設置の要望が出てきた。前々年には500米離れた地点に国学院幼稚園が開設されていたが幼児人口の増加に追いつ

あろう。七輪をあおぎながら、洗濯をしながら、ドーバービーチでも口ずさみなさい。それでいいんです。とよくおっしゃった先生。或いは私達の殆どが平凡な主婦になり、いつの日か感じるであろう空しさを見抜かれて、慰めておいて下さったのではないかとさえ思われるのだ。

私達皆の人生がその為により豊かであったかどうかはよく分らないが、少なくとも私にとっては英和の短大にあったあの二年間こそが玉のような日々であり、思い出しても心ときめくエクスタシーそのものなのである。今の短大の建物からは昔を偲ぶすがもなく、あのお厚いコンクリートの中でどのように進んだ講義がなされているのか知る由もないが、形はともあれ、卒業生全ての心の故郷であるには間違いない。短大も、はや四半世紀を経た。益々の発展を心から祈って止まない。

かえで幼稚園主事 飯田 泰造



かえで幼稚園

けず、幼稚園設置が待望されていたのが実状である。

一方短大保育科では新しい保育の探求や、教育

実習の場の問題など、付属園の設置が切望されていた。折から1974年は学院の90周年に当たっており、その記念事業の一つとして短大直属の幼稚園設立計画が具体化することとなったのである。1971年の半ばに設立準備委員会が発足、学院内各部との調整にかかり、翌年の2月学院理事会に於て承認され漸く設立の歩を進めることとなった。同月設置計画の申請を神奈川県に提出、3月に承認されると同時に先ず整地から始めねばならなかった。当時はまだ一面の山林を伐採したまゝの雑草の茂った丘であり、高い所で約3米、2,300平方メートルを平坦にするのはかなりの大工事であったが東亜コンストラクトの磯部昌正氏が奉仕的に工事を引受けられた。園舎の設計は伝建築設計事務所の渋谷栄一氏をわずらわし、施工は佐藤秀工務店に依頼した。6月10日起工式が鳥居坂教会の大竹牧師によって執行された。

幼稚園の開園は園児の募集から始まるが、募集行為は建築工事の80%が進捗していないと出来ない規則があり、このために工事の遅滞は許されず、厳しい折柄の暑さの中を連日突貫工事で間にあわせてもらった。11月初め躯体が完成、工事中の園舎で第1期生135名(3歳児15名、4歳児90名、5歳児30名)の応募受付を行った。反響は意外に多く応募者は504名に及んだ。諸事情から選考は抽籤をもって行い、短大教員によって135名(定員は150名、今回のみ特別)を決定した。12月10日竣工し、施工者より学

院に引き渡された。

建築は保育室及び遊戯室は鉄骨構造平家建、3才児保育室と管理棟は鉄筋コンクリート2階建、階上に会議室と学生の集会、宿泊可能な研究室等を併設したことは、短大が新しいプロジェクトを行うための研究と、教育実習を機能的に行うための意図によるものであった。総坪数約1,083平方メートル、建築費約6,000万円、内部設備費約500万円、外整備費200万円であった。構造的には特別に意欲的なねらいをもったものではなく、むしろ平均的一般的な園舎と言うべきだが、内部の施設には保育のために意を用い、各年令にマッチした配慮をした。保育室間のアコーディオンカーテンはクラスを解放して保育をオープンに出来るようにし、家具をユニット方式にしたのも子どもたちが自主的に環境構成できるようにとの配慮をしたなどである。これは本園の保育形態や方法とも関連あるもので、後々十分な効果をあげ得ている。

1973年1月26日設置認可があり、正式に学校法人幼稚園となり園名を「東洋英和女学院短期大学付属かえで幼稚園」とした。

2月24日、完成した園舎の献堂式を挙行し、初代園長として石井次郎短大校長が兼任、短大との連繫を密にするために飯田泰造主事が出向し、主任教諭として土橋克子教諭が東洋英和幼稚園より移籍の上保育にあたることとなった。

同4月5日、第1回の入園式を挙行、6名の教諭が加って保育を開始した。

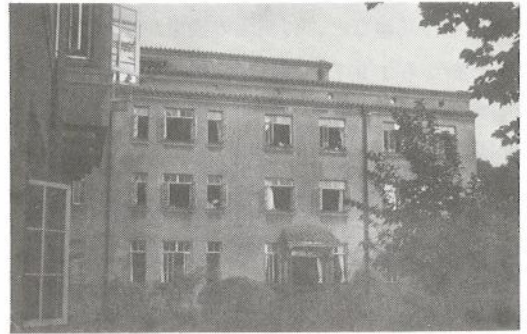
昭和25年ごろの青楓寮

山崎 マツノ

保育専攻部が短期大学になりました年は、15人が第一回の短大生として入寮しました。その他

に保育専攻部最後の2年生、中学生、青山の女子学生など合せて63人の寮生でした。当時の寮監

は昨年6月に故人となられた川尻知恵先生でした。青楓寮は短大の校舎でもありました。2階の部屋と洗面室は寮として、1階の応接室、3階の礼拝堂は短大と共用でした。3階4階は短大になっておりました。朝6時の起床から夜10時の消灯迄寮生活には規則がありました。川尻先生、短大の事務の鎌倉ヒルタ先生と私は朝5時には朝食の仕度にかかり、手伝いの学生は間もなく眠い目をこすり乍ら台所に降りてきました。6時の起末の鐘で洗面をし、朝食迄に各自の部屋と共同使用の場所を掃除しました。戦後5年を過ぎた頃でしたか物産が豊かではありませんでしたので、食生活では薪でお釜の御飯を焚くなど時間がかかり、材料と料理を工夫し栄養や経済を考えました。今では考えられない苦勞も懐かしい思い出となりました。お弁当もつくりましたがお腹が空くのでしょう中味は早々に片づけられていたようです。短大と寮が同じ建物ですから何かと寮生には便利ですが、1日の授業が終る迄は通学生と同じ寮の部屋への出入りはしないことになっていましたが…。通学生も先生方も帰られて、6時頃から夕食が始り、その日の様々な話はずんだ楽しいひとときでした。7時には礼拝堂で毎日当番の寮生による夕礼拝が守られました。このあと9時半迄が自習時間でした。この時間の使い方には色々と思いをしほったようです。そのほか外出は夕食の6時迄に、外泊は認められませんでした。特別な事情のない限り…。土曜日は自由にお休みを過ごしました。日曜日は教会学校の奉仕をしたり、全員が教会の礼拝に出席しておりましたので、日頃の様子と違って、寮はひっそりと静まりかえっておりました。この時代の寮生は短大の勉強と寮生活から何でも学んでおこうと一生懸命でした。それだけではなく温かい思いやりがあり、やさしさがあって一緒に生活していても心が通い合いお互いに家族のような気持で安心して寮の生活をしていたと思います。このような青楓寮の生活にもうひとつ深い関わりがありましたのは渡り廊下でつながっている宣教師館の先生方でした。カナダの婦人ミッションの先生方と伺っておりました。



青 楓 寮

多分この頃にいらしたのは保育専攻部時代に責任をとられたローク先生、きびしく熱心で一人一人の学生をよく知っていたスクルトン先生、コーテス先生、ハミルトン先生、マシューソン先生、サンダス先生方ではなかったでしょうか。寮のクリスマスにお出でいただき、宣教師館のお茶の会には寮生が招かれたりしました。この先生方の温かい心の支えが寮生にも伝わった事でしょう。それから忘れることができないのは前院長の長野彌先生でした。青楓寮の設備のこと、食糧のことなど何かとお心にかけて下さいましては、短大にお出かけの時には必ず寮にもお見えになりました。いろいろな思い出はふくらむばかりですが、このころの寮生は東洋英和の短大で学んでいるのだという気持が一人一人にありましたから、毎日の生活のさまざまな事にその心があらわれておりましたことが私の心に残ります。青楓寮ですごした卒業生にとっても忘れられない2年間ではなかったでしょうか。その年々の一人一人の寮生の思い出を刻んで東洋英和の歴史に生きた懐かしいこの青楓寮も来年の春には閉じられることになりました。今年、学院は95周年を迎え、やがて短大は30周年を迎えることでしょう。

時の流れはほんとうに早いものとしみじみと思ひめぐらす此の頃です。

あ と が き

第7号は、学院各部の初期の時代について執筆していただきました。御協力をありがとうございました。
(短大 芝原・藤園)